

## 自然を無意味に寫すと不自然となる

審査員 黒田清輝氏談

今度の懸賞寫眞について感じた事、また兼て寫眞に就いて、私の想つて居るところを搔抓んで申上げる事と致します。

今回の懸賞寫眞は出品者が中々多數であつた、これは寫眞界の爲め非常に賀すべき事であります。そして其成績の上から見ますれば、今回の應募寫眞が特に優れて居るとは一概に申されませぬが、兎も角も進歩の緒について云ふ現象は、明かに見られるやうに存じます。

この懸賞寫眞の規約廣告に、人物を主として歓迎すると記してあつた爲にもよるでせうが、人物を主としたものが比較的多かつた、これが今迄私が他の寫眞會に見たものとは稍趣を異にして居る點でありました。

成程美術的價值から考へたら、人物にまれ、風景にまれ、相違のあるべき筈はないのですが、美術を研くと云ふ點から申ますれば、人物を主として研究すると云ふ事は、餘程その進歩を助ける一手段であらうと信じて居ります。

此私の考へは或は寫眞に當筋らぬかも知れませぬが繪畫には實際其傾があります。何故と云へば、物の形を平面に現はすと云ふのが、既に繪畫でも、寫眞でも、其目的とするところでありますから、其現はした物體が、硬いとか乃至軟いとか、又畫面全體の色調の調和を得て居るか居ないかなど云ふ事は、只漫然と景色を寫し現はすと

云ふ事よりも、人物によつて研究する方が遙かに効果が多いと思ふのであります。

それは申すまでもなく人物の作品が一から十まで前申上げた種々面倒な條件に都合よく箝り難いものではありませんが、工夫次第によつては風景などから見ましたら、遙かに現はし易いだらうと思ひます、否、現はし易いと云ふと語弊がありますが、先づ現はし得られやうと思ふのです。そこで此人物の研究を充分やると云ふについて、作者はいかなるものを硬い作品と云ふか、いかなるものを軟かい作品と云ふか、乃至は又色の調和はどうすればよいかなどの點に、深い注意がなければならぬと思ひます。さもない限り、只漫然と寫したのでは、いかなる美人にもせよ、又いかなる姿勢にもせよ、美術的作品として推す事は出来ないと思ひます。從來見た多數の寫眞會に於ける作品は、多くは前述べた條件に注意せず、極めて不要意に、そして又極めて漫然たる、謂はゞ運任せの作と云ふやうなものが多いので、稀には幾分か繪を作らうと云ふやうな心持で拵へた寫眞を見受けぬでもありませんが、これとても繪畫に必要な條件を缺き、或は之を無視して、圖面に幾分の情緒を表はさうと試みたもの位が關の山であります。

これを喩へば霧の深い圖とか、夕方の海邊とか云ふのでも、成程圖面の上に趣味は表はれて居るに相違ないが、技術に必要な濃淡を得るやうに試みたものとか、或は軟かい中に緊りのあるやうな作品は藥にしたくもない、これは試みて出來ぬのか、全然試みないのか、兎も角心細い次第と云ふの外はありません。

繪に於て、又寫眞に於て、殊に寫眞が美術的に傾きつゝある今日に在つては、略繪畫に於て得られるだけの技術上の趣味は、矢張寫眞に現はれて居なければ、これを美術的寫眞とは申されませぬ。

此見地から今度の懸賞寫眞を評して見ますれば、色調の上に成功したのも見受けられざるは又肉づき乃至人物と背景との輪廓の濃淡などに餘程注意を拂つたと見える作品も一二は見受け、又風景の中にも只眼に見て所謂名勝の寫眞にせよ、夕方とか、薄日の光線を利用したとか云ふやうな風景の寫眞にせよ、其天候から得た趣味以外、美術について多少前申した條件を含んだものも見受けました、これは即ち一の進歩の階段に入つたものと思はれます。

總じて今度の寫眞に徹して見ましても、成程今申す通り、風景の寫眞も中々悔り難い作品も見受けましたが、只進歩の階段に入つたと申すのみで、未だ美術的に向上するには、餘程の研究と、餘程の年月とを閲さなければならぬが、そこへ行くと人物の寫眞の中には繪畫の趣味と同じ趣味を發揮するに努めた形跡が、歴々として目に觸れるので、これから益々この人物について研究せられたならば、他日の成功は期して待つべきであらうと思ひます。

そこで此研究に就いて、餘計な事ながら私の述べて置きたいと思ひまするのは、先づ寫眞と申すものは、これを繪畫に喩へて見ますれば、自然派の畫の如きもので、理想派の畫と云ふやうなものは、寫眞には不適當であります。ですから寫眞はなるべく自然から得るところの姿、自然から得るところの趣味、これ等を基礎とせねばならぬので、此自然に對して作るべき寫眞なる以上、いかなる物を寫すも自然と迎合せなければならぬ道理であります。

ところが實際は之に反して、自然を無意味に寫しますると、結果は不自然のものとなつてしまふ、ですから自然

をありの儘に現はせば、それが悉く自然の姿と迎合するかと云ふに、決してさうでない、反對に不自然になると云ふ事を記憶せねばなりません。

それからまた繪のやうな寫眞を作ると云ふ事になりますと、懊惱うらさく申すやうですが、繪畫に必要な條件を寫眞に現はすに就きましては、寫眞の技術上研究すべき點の多いのは勿論として、作者たるものが努めて多く洋畫を見る、そして洋畫の趣味を能く會得するやうになつてから、これが研究に向はれたいものと思ひます。そうすれば、其人の撮つた寫眞は、繪畫と同じ條件をもつた、趣味の深い、まつたくの美術的寫眞が出来ますので、今度の出品寫眞中にも、矢張繪畫から出た形跡のあるコンポジションが二三見受けられました。これは寫眞界にとりては進歩の一階段として賀すべき傾向に相違ありませんが、今回の寫眞のやうに、明かに其寫法が繪畫から出たと見えるやうでは、まだ前途は遠いと云はなければなりません。けれどもまた一面から云へば、寫眞の進歩は、この摸倣的のものに始つて、やがて將來個人的に獨立的の作品が出来ねばならないのですから、極めて有望な現象と云つてよろしからうと思ひます。

終りに臨んで寫眞に繪畫を學びつゝあると云ふ實例は、前回の出品寫眞と、今回のそれとを併せ致へて見ましても、日本の作品に比較しては、外國から應募した寫眞が優勝で、日本の作品は彼に比して見劣りのせられるに徴しても歴然たるもので、これにはまた二つの大なる原因が存するのであります。

即ち一は日本在住の人が繪畫を見る事が狭い、これは其機會に乏しいのと、又まるで繪畫を知らない人が多いからであります。それから人物の點に於ては又其肉つきが骨格の上から云つて、西洋人の方が天然に近い、日本の婦

人などは、どうしても肉に丸味をもつて居ます、そして骨の凹凸の形ちに乏しい、若し日本在住の撮影者にして、人間の骨格から解剖的の教育知識があれば、其缺點たる丸味を程よく修正する事が出來ますが其知識が缺けて居て、全然天然の形ちによるとすると、丸くなり過て骨のない、張子のやうな姿が現はれます。姿の中でも、特に腕とか指とか、首、頬の邊にありくと其缺點が見出されますが、その最も注意すべきは鼻の形ちであります。日本人の撮影には鼻梁はなばしらの骨の部分と、肉の部分との關係がよく現はれて居りませぬ、それ故日本人が日本人を撮影した場合には、どうも西洋のそれよりも見劣りがするのであります。

既に日本人にはかう云ふ缺點のある以上、寫眞術を研究しようと云ふ人は、西洋より遙かに大なる努力を要さねばならぬので、努めて繪畫を見る事、そして又人物畫に於ては丸味を程よく撤る、それには骨格の研究を充分に積まなければならぬ事。この二つの缺陷に於いて西洋の寫眞よりも、日本の方が一層の注意と、一層の苦心とを要する次第であらうと思ひます。

『みつこしタイムス』七十三明治四十二年二月

明治四十二年に三越で行なわれた第三回懸賞写真の審査所感。この折の審査員は黒田の他に岡田三郎助・和田英作といった洋画家、および石橋思案(博文館『文芸倶楽部』編集)、小倉俊司・加藤精一(坪内逍遙門下の役者)、坪谷善四郎(博文館取締役)、久野轍輔という面々だった。松戸市戸定歴史館の齊藤洋一氏のご教示によれば、明治の華族による写真投稿誌『はなのかけ』にも黒田は作品評を寄せているという。